



21世紀に生きる君たちへ その2

司馬遼太郎

□本日、5校時、卒業式に向けての学年集会を行いました。

義務教育終了の大事な卒業式を、厳粛に、しっかりとした気持ちをもって迎えてほしいと思います。

司馬遼太郎の文章の後半を紹介します。

二十一世紀に生きる君たちへ 司馬遼太郎

(前号の続き)

さて、君たち自身のことである。

君たちは、いつの時代でもそうであったように、自己を確立せねばならない。

自分に厳しく、相手にはやさしく、という自己を。

そして、すなおでかしい自己を。

二十一世紀においては、特にそのことが重要である。

二十一世紀にあつては、科学と技術がもつと発達するだろう。科学・技術が、こう水のように人間をのみこんでしまつてはならない。川の水を正しく流すように、君たちのしっかりした自己が、科学と技術を支配し、よい方向に持つてほしいのである。

右において、私は「自己」ということをしきりに言った。自己といつても、自己中心におちいつてはならない。

人間は、助け合つて生きていくのである。

私は、人という文字を見ると、しばしば感動する。ななめの画がたがい支え合つて、構成されているのである。

その中でも分かるように、人間は、社会をつくつて生きていく。社会とは、支え合う仕組みということである。

原始時代の社会は小さかつた。家族を中心とした社会だつた。それがしだいに大きな社会になり、今は国家と世界という社会をつくり、たがいに助け合いながら生きていくのである。

自然物としての人間は、決して孤立して生きられるようにはつくられていない。

このため、助け合う、ということが、人間にとって、大きな道徳になつていく。

助け合うという気持ちや行動のものとは、いたわりという感情である。

他人の痛みを感じることも言つてもいい。

やさしさと言いかえてもいい。

「いたわり」

「他人の痛みを感じることにやさしさ」

みな似たような言葉である。

この三つの言葉は、もともと一つの根から出ているのである。根といつても、本能ではない。だから、私たちは訓練をしてそれ自身につけねばならないのである。

その訓練とは、簡単なことである。例えば、友達がころぶ。ああ痛かつたらうな、と感じる気持ちを、そのつど自分の中でつくりあげていきさえすればよい。

この根っこの感情が、自己の中でしっかり根づいていけば、他民族へのいたわりという気持ちもわき出てくる。

君たちさえ、そういう自己をつくつていけば、二十一世紀は人類が仲よしで暮らせる時代になるのにちがいない。

鎌倉時代の武士たちは、

「たのもしさ」

ということをして、たいせつにしてきた。人間は、いつの時代でもたのもしい人格を持たねばならない。人間というのは、男女とも、たのもしくない人格にみりよく感じないのである。

もう一度くり返そう。さきに私は自己を確立せよ、と言つた。自分に厳しく、相手にはやさしく、とも言つた。いたわりという言葉も使つた。それらを訓練せよ、とも言つた。それらを訓練することで、自己が確立されていくのである。そして、「たのもしき君たち」になつていくのである。

以上のことは、いつの時代になつても、人間が生きていくうえで、欠かすことができない心がまえといふものである。

君たち。君たちはつねに晴れあがつた空のように、たかだかとした心を持たねばならない。

同時に、ずつしりとたくましい足どりで、大地をふみしめつつ歩かねばならない。

私は、君たちの心の中の最も美しいものを見続けながら、以上のことを書いた。

書き終わつて、君たちの未来が、真夏の太陽のようにかがやいていくように感じた。

